

北太平洋と日本におけるさけ・ます類の資源と増殖

えづれ むつこ
江連 睦子 (企画課情報係長)

2003年の北太平洋

漁獲数

第12回NPAFC年次会議における各国の報告によると、2003年1-12月の北太平洋の漁獲数は4億2,900万尾で、このうち前年の報告がなかったWOCIやサクラマスの漁獲数を除いても前年の3億400万尾より40%増加しました(図1A)。

これを魚種別に見ると、カラフトマスが最も多い2億8,200万尾で全体の66%を占めており、前年に比べ55%増加しました。次いでサケが9,900万尾(構成比23%,対前年比122%),ベニザケが4,000万尾(構成比9%,対前年比116%)と続き、これら3魚種で98%を占めています。ギンザケとマスノスケは、それぞれ対前年比89%,239%でした(図1A)。

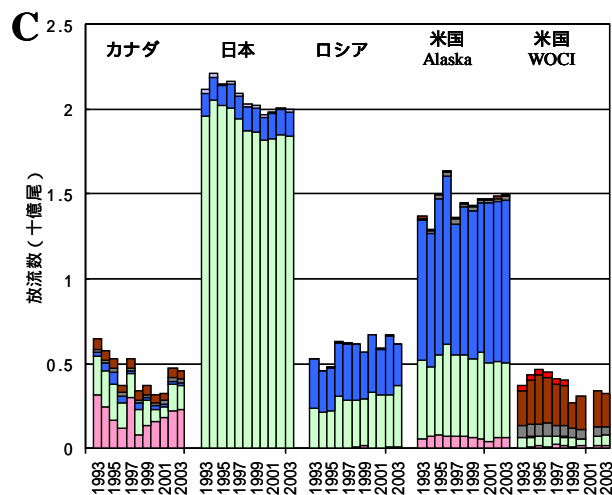
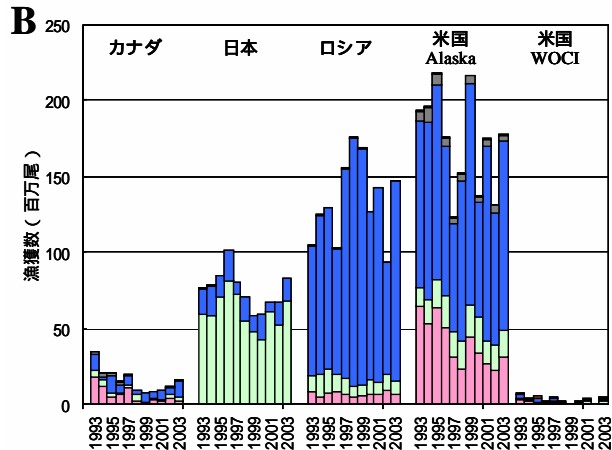
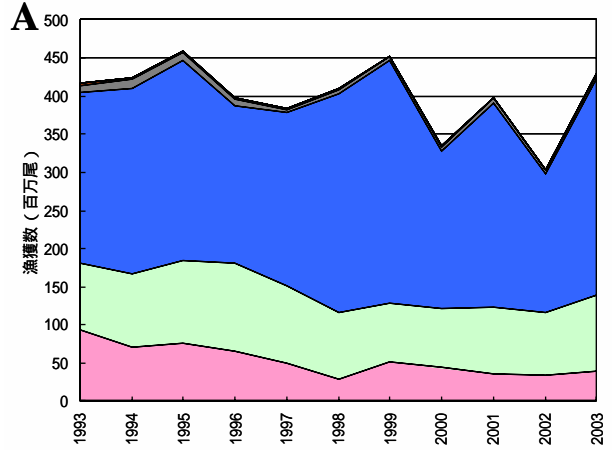
地域別では、アラスカ州が1億7,800万尾と最も多く、以下、ロシア1億4,700万尾、日本8,300万尾、カナダ1,600万尾と続いています(図1B)。なお、2003年度に新たに加盟した韓国ではサケの漁獲数が4万尾と報告されました。

人工ふ化放流数

2003年1-12月に人工ふ化放流された幼稚魚数は49億900万尾で、前年の49億8,000万尾に比べ1.4%減少しました。

魚種別ではサケが28億5,000万尾で半数以上を占め、これに次ぐカラフトマスの13億6,000万尾と合わせると全体の8割以上を占めました。

地域別では日本が20億尾と最も多く、以下、アラスカ州14億9,700万尾、ロシア6億1,600万尾、カナダ4億5,700万尾、WOCI3億2,500万尾、韓国1,500万尾と続いています(図1C)。



■ 魚種未報告 ■ ベニザケ ■ サケ
■ カラフトマス ■ ギンザケ ■ マスノスケ
■ スチールヘッド ■ サクラマス

図1. 1993-2003年の北太平洋におけるさけ・ます類の魚種別漁獲数(A), 地域別魚種別の漁獲数(B)及び人工ふ化放流数(C). 1993-1998年は「NPAFC Statistical Yearbook」による商業漁獲数の確定値だが、1999年以降はNPAFC年次報告等で示された暫定値である。1998年までのロシアにはEEZ(排他的経済水域)で他国が漁獲したものを含む。WOCIはワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。WOCIで図示していない年があるのは未報告のためである。韓国は他国と比較してわずかなため、図では省略している。

2004年度の日本

サケ

2004年度の来遊数（沿岸海面での商業漁獲と内水面での親魚捕獲の合計）は1月31日現在で7,700万尾、前年度同期比104%でした。来遊数は1996年度に過去最高を記録して以来、4年連続で減少しましたが、2001年度以降は増加傾向に転じています（図2）。

これを道府県別にみると、北海道では過去最高を記録した前年度をさらに若干上回ったほか、青森県を始め新潟県以北の日本海側の各県で前年

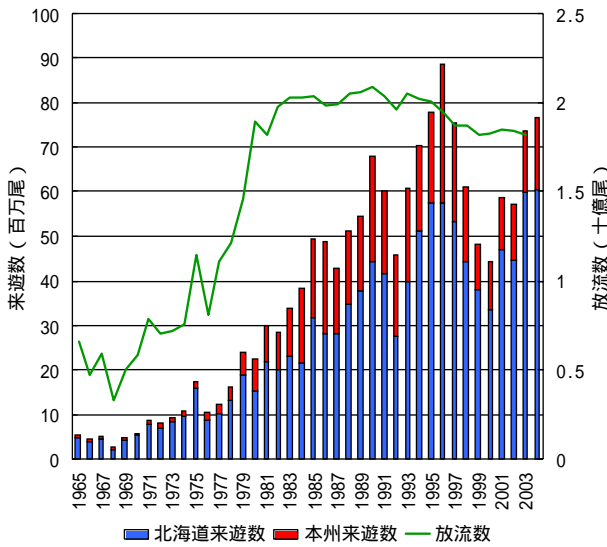


図2. 1965-2003年度の日本におけるサケの来遊数と人工ふ化放流数。2003年度は12月31日現在。

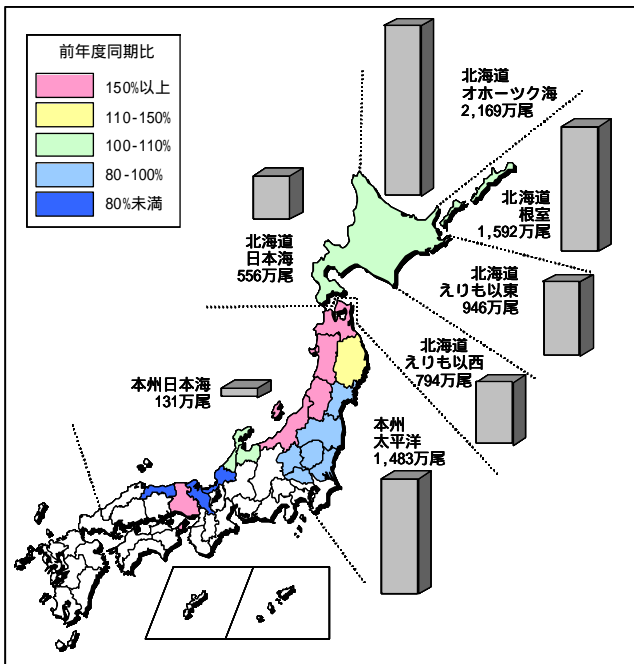


図3. 2003年12月31日現在の日本におけるサケの来遊数。直方体の高さは来遊数の相対的な大小、色分けは対前年度同期比を示す。

度比150%以上となりました。一方、本州太平洋側では岩手県を除く宮城県以南の各県で前年度を1-2割下回りました（図3）。

海区別にみると、他の海区で資源の回復傾向が見られたにもかかわらず、低水準のまま推移していた北海道日本海で2004年度は前年度比196%と大幅な増加となりました。また、本州日本海でも前年度比180%に達し、過去最高を記録しました（図4）。

なお、採卵数は既に22億2,000万粒を確保し、計画数21億7,000万粒を満たしていることから、放流数もほぼ計画どおりの18億2,000万尾程度と見込まれます。

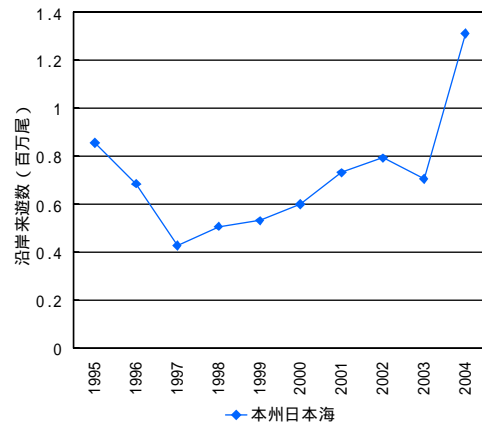
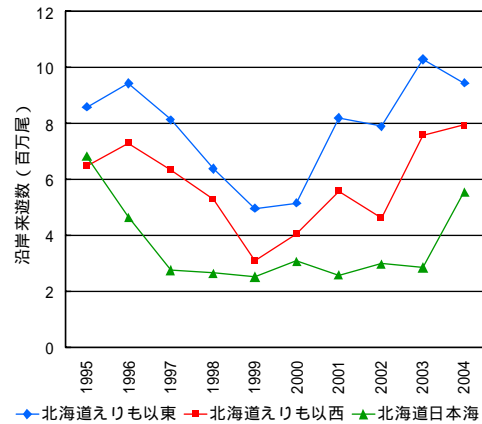
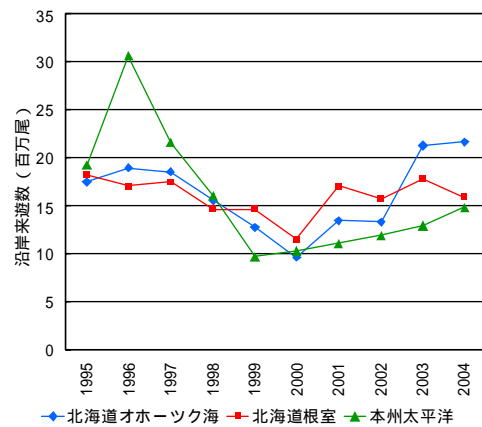


図4. 1995-2004年度の日本におけるサケの海区別来遊数。2004年度は1月31日現在。

カラフトマス

主産地である北海道における 2004 年度来遊数は 600 万尾で前年度比 49% となりました。カラフトマスの来遊数は 1994 年に急増して以来、隔年の資源変動を示し、1994-2002 年の偶数年級群での平均が 1,500 万尾、奇数年級群のそれは 700 万尾で、両者にはおよそ 2 倍の開きがありました。2004 年度は豊漁年にあたりますが、奇数年級の平均を下回る結果となり、不漁年ながら異例に高い水準であった前年度と逆転しました。なお、採卵数は 1 億 8,000 万粒でほぼ前年と同数なので、放流数も前年並みの 1 億 4,000 万尾程度と見込まれます (図 5)。

サクラマス

2004 年度の北海道における河川捕獲数は 8,700 尾で前年度比 49% と半減しましたが、採卵数は 490 万粒でほぼ前年度並みとなっております (図 6)。なお、本州の資源については現在調査中です。

ベニザケ

2004 年度の河川捕獲数は 500 尾で前年度比 170% と大きく増加し、採卵数も 50 万粒と前年度より 50% 増加しました。当センターでは北海道の 3 河川でベニザケの人工ふ化放流に取り組んでいますが、近年は 1990 年代前半に比べると少ない状態が続いています (図 7)。

放流数の年度区分

放流数に用いる年度区分については、一般的な 3 月末で区切る会計年度とは期間が異なります。サケの場合を例にとると、親魚の回帰時期は 8 月から 2 月にかけてで、この親魚から得た種苗は翌年の 1 月から 6 月にかけて放流されます。サケの人工ふ化放流は親魚の捕獲を起点として、その親魚から得た種苗を放流し終えるまでを一つの周期としているため、「2004 年度の来遊数」は 2004 年 8 月から 2005 年 2 月にかけて来遊した尾数を指しますが、「2004 年度の放流数」の場合は 2005 年 1 月から同年 6 月までに放流された尾数を指しており、会計年度でいうところの 2004 年度に放流した分も一部含まれています。

なお、NPAFC の統計の場合は漁獲も人工ふ化放流も年、すなわち 1 月から 12 月までを単位とすると定められています。このため本稿では、NPAFC の資料を使用する北太平洋の漁獲数、放流数については「年」、日本の来遊数、放流数等については「年度」と使い分けており、例えば 2003 年の放流数と 2003 年度のそれは一致しないのでご注意ください。

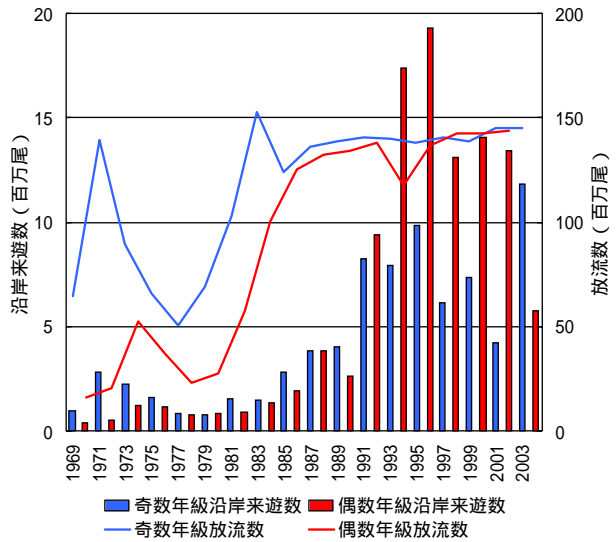


図5. 1969-2004年度の日本におけるカラフトマスの来遊数と人工ふ化放流数。2004年度は概数。

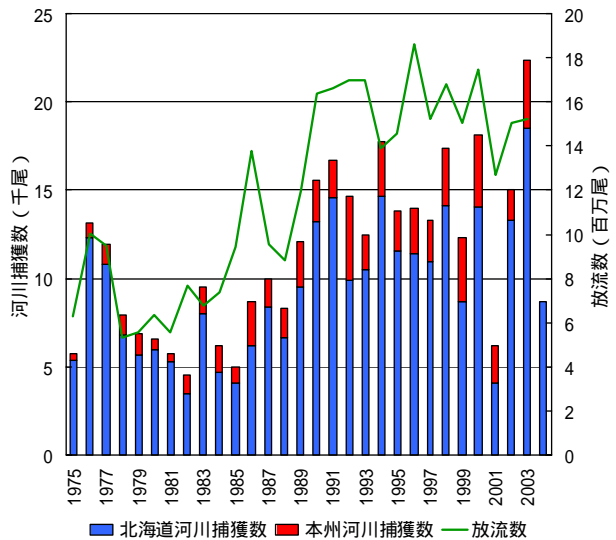


図6. 1975-2004年度の日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数。2003-2004年度は概数。

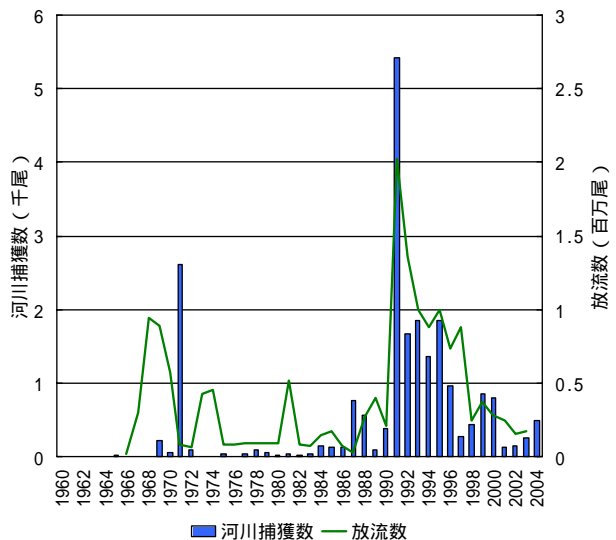


図7. 1960-2004年度の日本におけるベニザケの河川捕獲数と人工ふ化放流数。